

---

# 戦慄の鎮魂歌

片瀬 瞬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

戦慄の鎮魂歌

### 【Nコード】

N3146V

### 【作者名】

片瀬 瞬

### 【あらすじ】

幻影 それは夜の支配者。かつてこの世界に生きていた者たちの怨念が具現化したもの。生きたい、死にたくないという純粋な願望が闇に喰われる。一度幻影になれば生きるために人の血を望むようになる。夜になると人を襲い自らの血肉とする。そんな悲しい存在だ。

しかし、闇があれば光もある。闇夜に君臨する月のような存在。<sup>レクイエム</sup>鎮魂師と呼ばれる聖職者だ。彼らは古の時代より伝わりし力、<sup>クイエム</sup>『鎮魂歌』により幻影を滅する。

アスレイはそんな鎮魂師の中で随一と噂される少年だが、気まぐれな国王陛下により鎮魂師養成学園ベルナールに入学させられる。そこで魅せる彼の姿をご覧ください！

作者が受験中のため執筆を一時中断します。

この作品はメビウスリンクにて掲載していました。今回はその改訂版です。

## Prologue

Prologue 記憶の中で

ここはどこだ？

そんな第一印象を受ける。しかし瞬時にしてその印象は消え去る。何故か？

それが自分にとって見覚えのある場所で、そしてもうない場所だからだ。いや、正確に言えばあるのだが、自分の望む場所ではなくなっているということだ。もっと正確に言えば、自らの手で壊した場所、自分の思い出を壊した場所だ。

しかし見えるのは以前と変わらない風景。緑豊かな木々が揺れ、木の葉が歌い、噴水から湧き上がる水が涼しさを与える。公園の中央の時計台はあの日と同じ午後八時を示している。どうやら時間は止まったままのようだ。心地よい空間はそのまま自分を迎え入れてくれた。

だからすぐにわかる。これが夢だということに。夢を見ていてそれが夢だとわかることはない、何かの雑誌で読んだがどうやらそうではないらしい。夢でなければこの場所に来ることはないし、もし行くこうとする気持ちがあれば即座に自己嫌悪しているだろう。

(何をしているんだ。僕は)

夢の中で軽く自己嫌悪する。何を今さら思いだしているのか。あの時に戻りたいと思っても、戻ることなどできないのだ。何が起きようと確実に時間は進み、一瞬にして過去の出来事に変貌するのだ。そしてそれは二度と戻らないもので、引き摺るだけ自分を苦しめるのだ。

だから少年は歯を食いしばる。この夢と決別をつけるために。情けない自分に鞭打つために。そして、前に足を踏み出すために。

(僕はやっぱりバカだ)

聞こえない眩きをして、少年は　アスレイⅡエーデルワイスは  
渾身の力を込めた右の拳で、自分の右頬を殴る。  
夢の中だというのにとても、とても痛かった。

十　十　十

ここはどこだ？

そんな第一印象を受ける。しかし、すぐにここがどこで、どんな場面なのかがわかった。

(またこの夢だ)

動くのに邪魔にならないように短く切られた赤毛を撫でながら眩く。眩くといっても、これが夢である以上視界の先に言葉は広がらない。

(どうしてまたこの夢を見るのだろう)

また眩く。別にこの夢を見ること自体嫌いではない。むしろこの夢は自分にとって大切なもので、自分が歩む道を定めた大切な瞬間だ。

だから見ている視線の先には幼い少女がいる。まだまだ体も小さく、髪も長いままで、本当に少女という言葉が相応しかった彼女  
ミネアⅡスターチスがいる。

輝くような瞳で一点を見ている。取り憑かれたかのように目を大

きく見開いて。

その視線の先にはミネアよりも背の高い、だけど歳数はミネアとさほど変わりそうもない少年が立っていた。栗毛の髪に、燃えるような赤い瞳を持つ精悍な少年だった。

少年は右手に半透明の赤い刀身を持つ刀を握り、前を見つめていた。睨んでいたという方が正しいかもしれない。

少年の目の前に広がるのは、彼の瞳と同じ燃え盛る炎だった。凄まじい音を立てながら何かを包み込んでいる。包まれている何かは、四足でごつごつとした体をしていて、一見すると巨大な狼のようである。

狼は苦しいのだろう、何とも言えない悲痛を上げる。それは相手を威嚇するものとは違い、可哀想なほどか細いものであった。

そんな狼に向かって少年が語りかける。

「苦しいか？ 苦しいよな。でもこれがお前を助ける方法なんだ」

言葉は申し訳なさそうだが、少年の表情は決して申し訳そうではない。不敵な笑みを浮かべてむしろ楽しそうだ。ちよつとだけ怖い少年は握っていた刀を胸の高さに持つてくる。そして間を置くことなく横に薙ぎ払う。速度は遅い。薙ぎ払うという言葉が似合わないほどに遅い。なのに、その速度を裏切るかのように斬線は巨大な炎に包まれた狼を真っ二つに裂いた。

紅蓮の炎も共に消え去り、その場には二つに分かれた肉の塊しかない。しかしその塊もやがて風に運ばれる砂のように消え去った。

幼いミネアはしゃがんだまま、瞬時のうちに起きた出来事を見つめていた。そしてその現象を必死に理解しようとする。脳内で同じ答えが廻る。

何故だ。何故だ。何故だ。何故だ？

理解できないものを見たとき、人はおそらくミネアのようになるのだろう。理解しようと悩んで悩んで、訳がわからなくなる。

そしてその中でいつも目が覚める。

## 01 邂逅

月が煌めいていた。漆黒の夜に煌煌と輝く星たちを引き連れて君臨している。今日は満月ということもあり、いつもより月明かりが眩しく感じられた。

そんな中、煉瓦造りの家が建ち並ぶ街を一台の車が駆け抜けていた。夜と同じ黒色の車で、月明かりが無ければそのまま闇に溶けてしまいそうである。長くて艶のある車体は、外見だけで判断すると金持ちが乗っつていそうな車、というところだろうか。

アスレイはその車内の助手席にいた。はじめは夢から覚めたばかりで意識がはっきりとしなかった。しかし、次第に淡い月明かりの柔らかな感覚と、右頬に感じる強烈な痛みがアスレイを現実引き戻す。右頬の痛みはおそらく自業自得だが。

(やっぱり僕はバカだ)

夢の中の出来事と連動して自分を殴るなどなかなかできない芸当だ。ましてや自分の頬を殴るぐらいであるから、おそらく夢の中の会話も寝言として口に行っているだろう。それを想像するだけで恥ずかしくなり、アスレイは赤面する。

その瞬間を待っていたように笑い声が隣から聞こえてくる。いや聞こえてくるなんて甘いものじゃない。火山の噴火のような勢いだった。そう、笑いの噴火だ。

「あはははははは！ あっははは、あゝおかしい」

甲高い、よく響く声で、聞き方によればどこか狂ってしまったのではないかとも思う。

アスレイはその光景にむくれる。

「そんなに笑わなくてもいいと思いますが」

平静を装った声だが、顔は窓の方を向いていた。赤面した顔を見られたくないのだ。どうでもいい男の意地が働いているらしい。

「いや、だっておかしいでしょ。普通、自分の夢の出来事を現実で行いながら寝てる人いないよ。ましてやあんな苦い思い出を、ね」

隣の人間が『苦い思い出』にやたら含みを持たせて言う。言ったのは運転手の女性だった。長いウェーブのかかったオレンジの髪が、月明かりで時折光って見える。

アスレイはこの人物が苦手だった。別にそれは恥ずかしいところを見られて笑われたからではない。もともと何事に対してもこの人は楽観的なのだ。そして計画性はなく、危なっかしい。今だってお腹を抱えて笑うために、ハンドルから両手を離している。

「どうでもいいじゃないですか。そんなことは。それより……」

「それより？」

その瞬間にダメだと思った。アスレイの顔が引きつる。この人の楽しそうな顔の前にはどんなことも無意味になる。他の人には今のことを内緒にしてくれ、なんて切り出せるわけがないのだ。

だから不自然じゃないように話題を変える。それも気になっていたことだ。

「それより、なんで僕がレグルスに行かなくてはいけないのですか？」

今度は少しだけ立ち向かう目で相手を      ルピナスⅡスヴェンパ

―スを  
見る。

## 01 邂逅

笑っていたルピナスの表情が引き締まる。自分が訊いたにも関わらず、その表情の変化に今すぐにもでも質問を取り下げたい衝動に駆られる。

少しの間を置いて、ルピナスはきっぱりと答えた。

「理由がなくちゃダメなの？」

短い言葉だった。しかし、アスレイの疑問、反発を抑えるには十分な迫力があつた。その証拠にアスレイは黙り込んでしまう。そしてどうやらアスレイの質問の追撃は許されならしい。ルピナスの目がアスレイに釘を刺している。猛獣が小動物を威嚇するような鋭い目で。

「いや、まあ……」

アスレイ本人もこんな生返事を絞り出すのが精一杯であつた。その生返事をするのにさえ時間が少しかつた。そして自分がいかに弱いか思い知らされる。肉体的にはない、精神的にである。

いまだに鋭い眼でアスレイを見ている。それに対してアスレイは眼を泳がせるしかなかった。

(これだから……この人には逆らえないんだよな)

すっかり小さくなったアスレイに、またルピナスは笑う。そしてようやく放していたハンドルを手に戻す。

「まあたいした理由はないわ。あなたも十五歳になつたし、学校に

行くのは当然だと思っけど。むしろ初等、中等学校に行かなかったのがおかしいくらいね」

からかうようにルピナスが言う。

あまりにも正論すぎてアスレイは反論できない。確かに十五歳という年齢は高等学校に進学する年齢である。アスレイは初等も中等も通学していない。これは非常に問題なことだが、ルピナスの権力で握りつぶした。その代わりに優秀な家庭教師をつけられみっちり、もしかしたら学校よりも厳しい勉強をさせられたかもしれない。今でも思い出すだけで頭が痛くなる。

しかしアスレイは心の中で呟く。

(あなたも行っていないじゃないか)

こちらにも正論であるが、言ったらおそろく面倒なので言わないでおいた。

「それともなに？ 王都に心残りでもあるの？」

「そういうわけじゃないんですか」

「じゃあなに？」

早く言いなさいよ、と言わんばかりにルピナスが圧迫してくる。

何かを期待するような目でアスレイを見るので、アスレイは口ごもってしまふ。別にやましい気持ちがあるわけではないのだが。

それでも何とか返事をする。

「僕が王都を出るということを陛下はどうも思わないのですか？」

アスレイは真っ直ぐな目でルピナス、陛下を見る。そう、ルピナスは王都スヴェンパースの女王なのである。とても女王とは思えな

いフランクさであるが。ということアスレイが初等、中等学校に通わなくても良かったのは彼女の権力のおかげである。

そのルピナスは『陛下』という言葉にムツとする。自由を好む彼女にとって縛られるような呼び方は苦手なのだ。

「アスレイ、陛下は禁止って言ったはずだけど」

視線はフロントガラスの先にあるが、言葉は面と向かって言われるよりも重い。少し怒っているかのようだった。

アスレイも気付いたのだろう。瞬時に口を右手で抑える。

「すみません」

「まあいいわ。話を戻すと、あなたが出ることについてよね？全然問題ないって言ったら嘘ね。現状で六帝のうち一人を欠くのはかなり厳しい。」

会話からするとアスレイはかなりの実力者で、『六帝』の一人らしい。『六帝』とは省略形で、正式名称を『王都守護六帝』という。戦闘能力に長け、幻影の出現率、レベルの高い王都を守護する者たちのことだ。アスレイはその中でも最年少の守護者で、王都スヴェンパースでは『歴代最強守護』と専らの噂である。

「だから何故僕を外に出すのか訊いているんです」

「強いて言うならあなた自身のため、かしら」

思いもしない答えだったのか、アスレイは怪訝そうな顔をする。そして同じことを尋ね返す。

「僕自身のため？」

「そう、あなたのため」

「理解ができません。何故今この忙しいときに僕を王都へ出すのか。そしてそれが何故僕のためになるか」

言葉は平静を装っていたが、内心はかなり錯乱していた。アスレイには心当たりがないのだ。

ルピナスはその様子に大きなため息をつく。

「それを理解させるためにあなたを外へ出すのよ」

今のままじゃおそらく理解できないだろうけど、と付け足す。

アスレイはもう理解ができなかった。正確には理解しなくなかった。考えるだけで頭が痛くなりそうだった。

ルピナスはそれを横目に続ける。

「このまま王都にいてもあなたのためにならない。だから外へ出す。女王命令だからね」

「ヒントはないんですか？」

答えを見つける気などさらさらないが、見つけなければおそろく王都へは戻れない。そんな気がした。というより彼女が「女王命令」というときは絶対服従なのだ。今までその命令が下ったのは数少ないが、覆ったことは一度たりともない。だからヒントを請う。いつそのこと答えを言ってくれればいいのに。アスレイは心底そう思った。

しかし、ルピナスから帰ってきた答えは、アスレイの甘い願望を見事に蹴り飛ばした。

「ヒントはもう得ているはずだけど」

思いつきり頭を殴られた気分だった。やはりアスレイには理解で

きない。もう既に自分がヒントを得ている、と言われても心当たりはない。だからもう会話を続けるを止めた。

言葉を紡ぐのを止めてもルピナスは何とも言わなかった。彼女自身も話すことはないと思っっているのだろうか。

車はどこまでも続きそうな煉瓦造りの住宅街を走っていく。

何とも居心地の悪い沈黙になったので、アスレイは窓を開けて車内の空気を入れ替えた。

春の少し冷たい夜風がアスレイの肌を撫でる。少し火照っていた体から熱が逃げていく。それが何とも気持ちよく、今までふらついていた心を落ち着かせてくれた。

アスレイはふと視線を月に向ける。今日は見事な満月だった。月はアスレイの気持ちなど理解するはずもなく、ただ煌煌と輝いている。しかし、アスレイは月を見てふと思いついた。鮮明な映像が頭の中を流れる。夢で見たあの光景と似ている。

「そつえばあの日も満月だったな」

小さな呟きが風と共に夜に溶けていく。運転席のルピナスにはおそらく聞こえていない。

## 01 邂逅

十 十 十

最悪の目覚めだ。

ミネアは、一人部屋のベッドの上でそう思った。何度見たか分からない夢に魘されて、ひどい寝汗を掻いたせいである。あの夢を見るとどうも体が熱くなってしまう。それは別に興奮しているとかではなくて。

そう思いながら籠った熱を追い出すために胸元をパタパタさせる。ついでに手元の電子時計を確認する。現在の時刻は午前二時過ぎ。どおりでまだ暗いはずだと、一人で納得する。

胸元をパタパタさせるだけではまだ暑いので窓を開けることにした。あまり飾り気のないベッドから降りて、窓を開ける。

程なく窓の外から春の夜風が部屋の中へ飛び込んできた。少し冷たい夜風が体を吹き抜けて熱をさらっていく。その感触がこの上なく心地よかった。

ミネアはそのまま窓に腰掛けて空を見上げる。夜空には煌煌と輝く満月が出ていた。淡い光を地上に降り注いでいる。不安な夜の闇を照らす唯一の光だ。

(夢の世界はどうだったかな? どっちでもいいか)

夢の世界では巨大な炎のせいで月の存在など気にならなかった。

ミネアは視線を自室に戻す。そして部屋中を見渡す。ミネアの部屋は学生寮の一室で、一人部屋の割にはかなり広かった。家具こそ少ないが、逆にそのおかげで開放感が溢れる。

何しろ寮といっても、一般の生徒とは違う。彼女が住んでいるこ

の寮はベルナル総合学園鎮魂科寮の一つである。さらに言えば、鎮魂科の中でもエリートだけが集まる集団、ベルナル学生鎮魂師部隊、通称小部隊のみが居住できる寮なのだ。一般生徒とは待遇がかなり違う。部屋の大きさを比較すると二倍以上差がある。さらに小部隊隊員は学費半額免除など優遇される。

何故鎮魂科だけがこのように優遇されるかというと、彼らには一般人とは違う能力があるからだ。それは幻影を滅する力『鎮魂歌』があるということだ。

幻影 それは夜の支配者。かつてこの世界に生きていた者たちの思念が具現化したもの。生きたい、死にたくないという純粹な心が闇に喰われ、幻影という悪魔に生まれ変わる。一度幻影になれば生きるために人の血を望むようになる。夜になると人を襲い自らの血肉とする。生きるためには、かつて自らも同じだった人間を殺さなくてはならない。しかし、多くの人間は死ぬ間際に、生きたい、死にたくない、と願う。故に幻影は無限に増える。幻影とは悲しくも皮肉な存在である。

鎮魂師はそういった幻影を滅するための職業で、生まれながらにしてその能力を有する。鎮魂師の持つ『鎮魂歌』でなければ滅することはできない。さらに死ぬ間際の人間に『鎮魂歌』を使うことで幻影に転生するのを未然に防ぐこともできる。つまり鎮魂師は幻影に対する人類の砦なのだ。これほど人類にとって頼れる存在はいない。それ故に生活は優遇される。社会的には当然の成り行きだ。

それは学生においても同じである。まだ卵とはいえ将来は人類の夜を護る鎮魂師なのだから、寮であれ、学費であれ優遇される。

しかし、ミネアはそれをあまり快く思っていない。例え自分が鎮魂師であろうと、同じ人であることに変わりはないのだ。戦う能力があるからといって優遇されるべきだと誰が決めたのだろうか。少なくともミネアはそんなことは望んでいない。

(私が変わっているだけなのだろうか)

そう思っても他人に口外したりはしない。

いつの間にか体の熱が抜けて、少し肌寒くなってきたので窓を閉める。それだけでなくも夜に窓を開けておくと幻影に襲われる可能性があるがある。ここは学園の寮であるので結界が張っており、そんなことはまずないが、この世界に生きる人間の基本的な行為である。

もう一度寝ようとベッドに足を踏み出したとき、部屋中に甲高い電子音が鳴り響いた。こんな真夜中に目覚ましのアラームはセットしていない。

リビングの電話が鳴りだしたのだ。

## 01 邂逅

リンリンリンリンリン

何てうるさい電子音だろうか。これではミネアの部屋中どころかフロア一帯に響きそうである。

この電話はミネアが買ったものではなく、初めから備え付けされていたものだ。でなければ、こんな近所迷惑な電話は買うはずがない。学園もとんだ嫌がらせをするものだ、とミネアも最初は思ったが、もう慣れてしまった。何よりどんな内容の電話でも取り損ねることがない。取るかどうかは別の問題として。

何回かコールが続いたが、無視する。そして再び時計を確認する。時計はやはり午前二時過ぎを示していた。

こんな真夜中に一体誰からの電話だろうか。当直の日なら出勤の知らせで、部隊長からの電話だろうが今日は非番だ。となるとこの時間にかけてくる人物に心当たりはない。非番の日にいい迷惑だ。

そのまま無視しようと電話に背を向けた。しかし、もし今日が非番ではなく当直で出勤を無視したら。その考えが脳裏をよぎる。

まだ近所迷惑のベルは鳴り続けている。

もし万が一今日が非番でなかった場合、ミネアは翌日に想像もしたくない罰を受けなくてはならない。しかし今日は間違いなく非番の日で、カレンダーにも今日の日付に赤丸をつけている。

どうする。休みたいけど、どうする。罰は受けたくない、どうする。どうする。

脳内で答えが出る前に、ミネアは受話器に手を伸ばしていた。結局罰ゲームの恐怖に屈した。自分の弱虫さを悔やむが、もう遅い。

そうだ、どうせ間違い電話だ。さっさと話を終わらせればいいだけだ。そう腹を括って受話器を口元に持つてくる。

「もしもし？ どちら様ですか」

「……………」

返ってきたのは深い沈黙だ。ミネアがなかなか出なかったことに怒っているのだろうか。それとも悪戯か。どちらでもいいが早く要件を済ませて欲しい。今日だけは間違い電話でも怒らないでおいでやるから。

あまりに沈黙が長いのでイライラしてきたミネアはもう一度訊ねる。声に若干棘があったのは本人は気付いていない。

「あの、どちら様ですか？」

「……………私だ」

返ってきたのは若い男の声だった。落ち着いた口調であるが力強さを感じる。悪戯電話の類で掛けてくる奇声紛いではないことに安心した。となるはずなのに、ミネアは今すぐ電話を切りたいという衝動に駆られた。

ミネアにはこの声の主が誰であるかわかる。それ故に電話の内容も大方わかる。そして急に自分の体温が下がっていくような気がした。

悪戯電話の方がやっぱり良かった。後悔は先には立たない。

声の主は、ミネアが所属するベルナル第二十一部隊隊長イーザンであった。

「隊長……………一応確認しますが、今日は非番ですよね？」

ミネアは一応命乞いも兼ねてそう訊ねておく。おそらく非番でなかったら命乞いも無駄であろうが。

少し間を置いてイーザンが答えた。

「なるほど、どおりで出るのが遅いはずだ」

「え、あ、あの……」

そこで言葉が詰まる。というより口の中が渴いて上手く動かないのだ。

これ以上の命乞いは無理だ。何より再び沈黙が二人を包んだのだ。ミネアの覚悟はもう決まった。次に発せられる言葉はもう分かっている。ミネアは自分に言い聞かせて、耳を塞ぎ少しでもダメージを軽減しようと対策する。しかし、その対策は見事に空振りすることになる。

「今日は確かに非番だ」

「すみませんでした！ 今からすぐに準備して向かいます。って……ふえ？」

思いもしない言葉にミネアはうろたえる。おかげで何とも間抜けな声が出てしまった。受話器越しにイーザンが笑いを堪えているのに気付いたが無視する。それよりも今日が非番ということに安堵する。

今日は非番。しかし、なら何故この時間にイーザンが電話してくるのかわからなかった。今度はこっちの方が問題になってくる。イーザンとは別に個人的に電話するほどの仲ではない。そもそもこんな時間にプライベートな話とは考えられない。ということは緊急事態なのかもしれないと思った。

そして今度の予想は的中する。

「緊急出動だ。そのまますぐに準備してロビーに来てくれ」

「……了解しました」

そこで受話器を置き、会話を終える。しかし何故だろう、心が落ち着かない。疑心暗鬼による精神的な疲れや緊急出動ということも

あるのだろうが、妙な胸騒ぎがして止まない。はっきりいって気持ち悪い。

緊急出勤は何度か体験しているので苦にはならない。自分たちが出勤するしかないので嫌とは言えない。しかし何だろうかこの感覚は。ミネアは自分の身に何か怒るのではないかと思っただが、そこで考えるのを止めた。現場に行かずにつんつんと唸っていても仕方がない。

とにかく出勤要請が掛ったからには出勤しなくてはいけない。ただ気分は良くないが、ひとまず着替えることにした。

(何も起きなければいいけど)

ミネアは若干重い手でクローゼットから隊服を取り出す。

## 01 邂逅

数分で黒の隊服に着替えてロビーに向かった。

三階の自室から黒い鉄製の螺旋階段を下りていく。この階段はロビーと直接繋がっているので移動するのに楽だ。

おかげでロビーには程なく着いた。すでにロビーにはミネアを除く隊員たちが待っていた。隊員たちの目はやや充血気味で体も気だるそうである。先ほどまで寝ていたことが窺える。アイマスクをしている者さえいた。

その中で一人落ち着いた様子で地図を見ている者がいた。第二十一部隊隊長イーザンだ。短く整えた藍色の髪に銀縁の眼鏡は、いつ見ても知的な印象を受ける。

ミネアは到着したことを伝えにイーザンに駆け寄る。

「すみません。遅れました」

ミネアはそう言ってイーザンに頭を下げ、その次に隊員にも頭を下げた。

イーザンが軽く頷いて周囲を確認した。とりあえず怒っていない様子にミネアは安堵する。

イーザンは全員いることを確認して、手を叩いて注目を集める。作戦内容が告げられるようだ。先ほどまでだらけていた隊員たちの目の色が変わる。真剣な眼差しでイーザンを見つめる。

イーザンは納得したようで話し始めた。

「皆、非番の日に呼び出してすまない。だがこういう場合もありえるということだ。切り替えて作戦に移るように」

イーザンの命令に、隊員たちの眠気は完全に去った。もうすでに

戦地へ赴く眼に変わっている。

「ではまず現状を確認する。エーリ、頼む」

イーザンが隣のエーリに話の綱を渡す。エーリはこの隊の情報伝達の役割を担っている者だ。

エーリが一步前へ出て説明する。

「私から説明させていただきます。午前一時五十分に巨大な幻影をリーダーが感知。当直隊の第二十部隊が現場に向かいましたがあえなく敗北。死者は出ていませんが、骨折などの重傷者が三名出ています。また同隊の情報管理者によると敵は一体だけのようです。敵は現在レグルス中央住宅街を進行中です。ここまでで質問は？」

長い説明を素早く、嘸まずに言う。その姿にミネアは毎度のことながら感心してしまう。精巧な機械ではないかと思う。

しかし、そんなことよりも当直隊が十分足らずで敗北したという事実に衝撃を受けた。学生とはいえ訓練を積んだ鎮魂師の集団である。その集団が十分もかからず撤退するとは、今回の幻影は相当ヤバイようだ。

他の隊員たちにも衝撃的だったようで、ザワザワし始めた。イーザンとエーリだけは動揺していない様子だった。

誰も質問しない　あまりにも衝撃的でできない　ので、エーリは話を続けた。

「次に作戦を伝えます。敵は一体だけということですので、全方位からの一斉攻撃を仕掛けます。そこでまず囿が敵を引きつけ、防戦を繰り広げているうちに残り全員が攻撃を仕掛けてください」

「囿は誰がやるんだ？」

どこからともなく質問が出てきた。

声の正体は、一番裏でアイマスクをしていた男、シャマルだ。アイマスクから覗かせる瞳はどこか楽しそうだ。

ミネアは背中がゾワゾワしていくのを感じた。シャマルは普段気だるそうにしているが、こういう誰かがやらなくてはいけないという時に目を輝かせる。そして罰ゲーム的なノリで誰がやるか決めてしまう。

エーリがため息を一つついてから答えた。またあなたですか、と言いたげな表情である。

「囿はまだ決まっています。何か良い人がいますか？」

エーリの機械的な対応にシャマルがニヤツと不敵な笑みを浮かべた。そして迷うことなく、いるよと答えてミネアの方を見た。ヘラヘラとした顔がさらに歪んでいく。

ミネアは悪魔を見た気分だった。

シャマルが全員に聞こえるように大声で宣言する。

「囿役は一番最後に来た人にやってもらいます」

その瞬間に大きな歓声が上がった。自分じゃなくてよかったと万歳する奴もいる。その光景にミネアはがっくり頂垂れる。出勤をこれほど疎ましいと思えたことはない。

気付けばシャマルがミネアの前に来ていた。ミネアの気など知らず、シャマルはどこまでも愉快そうである。終いには満面の笑みで、右手の親指を立ててグツとミネアに突き付けてくる。

ミネアは吐き捨てるように呟いた。

「……一度死んで来い」



## 01 邂逅

ミネアから放たれる殺気のためか、他の隊員たちはそそくさと寮の外へと足を向けていく。どうしたら今のシャマルの発言で困役は決まってしまったようだ。ちやっかりシャマルは、ミネアから遠く離れていた。

鍛錬を積んできた隊員たちだ、こんな時でも足取りは速い。各々がすでに配置を確認し終えて、自分の武器を装備し始めた。

たとえ非番の日に出動要請が掛つても不満は言わない。たとえ深夜二時に叩き起こされて眠くても文句は言わない。それが自分たちだけでなく他の隊でも同じであると分かっているからだ。さらに、自分たちが動かなければどうなるか、幻影を野放しにするとどうなるかを彼らはよく理解している。

恐怖に怯えるだけの一般人には到底分かりえない危険に立ち会っているのだ。先ほどまで生きていた人間を殺さなければならぬ時もある。彼らはそうした過酷な状況を生きていかなければならないのだ。そして人々が死ぬ間際に、『生きていて良かった』と思えるようにするのも鎮魂師の役目である。

だから今はどんなに眠くても辛くても現れた幻影を滅しなくてはならないのだ。

この都市 レグルスには、都市警察はない。鎮魂師は学園を卒業すると王都に勤めるシステムになっている。王都は他の都市に比べて幻影の出没数、レベルがケタ違いだという。鎮魂師の数はそれに比べ少なく、猫の手も借りたいくらいらしい。それ故に他都市で育てられた学生鎮魂師をそのまま王都へ配属するということだ。それはまた、この都市を守るのは学園鎮魂師しかないということでもある。自分たちがやるしかない。自分たちにはこの都市を守る義務があると誰もが思っている。

だからミネアもいい加減に重たい足を玄関へ向ける。困という重

役は少し大変　正直嫌だが断ることはできない。それが彼女の責務であり、都市を守る要なのだ。

「よし、行くとするか」

一人で呟き、両手で頬を叩いて気合を入れる。その瞳に迷いはない。

玄関にいたエーリから小型通信機を受取る。それを耳に掛けてから外へ出た。

外は当然暗かった。月明かりや街灯のおかげで明るいには明るい。それでも夜の闇全てをを払うことはできないのだ。そしてそれ故に幻影はこの世界に留まる事が出来る。闇を駆け、人を襲い、血肉を喰らう。

幻影こそが夜の支配者なのだ。人が抗うことを許さぬ、死の世界。鎮魂師はそれに唯一対抗できる小さな光。闇夜に君臨する月のような存在。

ミネアは深呼吸をして心を落ち着かせる。戦場に赴く前に必ずする行為だ。落ち着かなければ判断力が鈍る。元々死の世界に飛び込むのに、さらに自ら死に近付くのは馬鹿げている。だから落ち着かなければならない。この都市を守るために。自分を守るために。

深呼吸を終えると、目的地に、戦場に向かって高く跳躍した。近くの民家の屋根に乗り、瓦造りの屋根をテンポ良く駆けていく。

十 十 十

「ところで、あとどれくらいで学園に着くのですか？」

「あ、あと……さ、三十分くらいかな。ははは」

もう何回このやり取りをしたらだろうか。ルピナスは笑ってごまかしているが、アスレイはちっとも笑えない。

王都からレグルスまでは車で約三時間だ。今では交通整備されているので道に迷うことなどないはずなのに、現在迷っている。予定では午後十一時には到着するはずだったが、もうすでに日をまたいで午前二時過ぎだ。

どうすればここまで迷うのか。いい加減燃料の残量が心配になってくる。

運転を変わりたくてもアスレイは免許を持っていない。この際、法律など破ってもいいのではないかとも思う。

目的地に着かない車での移動にうんざりしたようで、アスレイはゴム毬を取り出し握力強化トレーニングを始めた。市販で売られている青色のゴム毬だ。そんなに硬くはない。握っては離し、また握る。そのたびにゴム毬からギュウギュウと悲鳴じみた音がする。

その様子を見たルピナスが半ば呆れた様子で答える。

「……車内で握力トレーニングとは、熱心なこと」

「ええ、僕は努力家ですから。』どこかの女王様』とは違って」

『どこかの女王様』にやたらと力を入れてアスレイが言う。ルピナスの顔が引きつった気がしたが無視した。

ルピナスがやや棘のある口調で、というより投げやりにも反撃した。

「悪かったわねえ。私は運転手だからできないのよ」

「運転してなくてもやらないと思いますよ」

「ふん、そんなこと言ってる横から爆弾投げつけるわよ！」

「爆弾で……子供ですか、あなたは。まあ、そうなった場合あなたを殺しても僕は逃げますよ」

あなたと心中なんて死んでも嫌です、とさりげなく付け足す。ルピナス的には横から爆弾を投げることなど造作もないが、隣の嫌味ったらしい少年から逃げる自信はない。いくら王都スヴェンパースの女王といえども、王都守護者の六帝と勝負すれば分からない。おそらく総合的に見ればルピナスの方が上だが、特定の力での勝負は負ける可能性は十分にある。

特に隣のアスレイにはスピード、さらに言えば手数で負ける。彼の武器は刀で抜刀術を得意としており、その上二本とも性能の違う刀なのである。真剣勝負をしたことがないので分からないが、幻影との戦いを見ればよく分かる。

アスレイの抜刀術は今までどんな幻影にも通用した。その圧倒的なスピード、手数の多さで『神速のアスレイ』と謳われるほどの刀術、体術においては六帝の中でも群を抜く。

だからここでアスレイを追撃するような真似はしない。軽いノリではぐらかしておく。

「そーですか。まあまだ死にたくないから止めとくわ」

「そうですね」

アスレイの一言と共に会話は終わり、再び静寂が車内を包む。

その車は依然と煉瓦造りの家が立ち並ぶ街路を走っている。ここはレグルス中央住宅街。幻影が進行をしている場所だ。

彼らはまだそのことを知らない。

しばらく車を走らせていると、異様な暗さが車の上に覆いかぶさった。同時に心地よかった夜風も止んでしまった。先ほどまでは明るく月が輝いていたのだが、今ではそれを感じる事ができない。嫌な予感が二人の背中を走る。

アスレイが窓から顔を出して確認すると、月が出ているはずの場所に月はなかった。それはもう、月に厚い雲が掛つていたりとかではなくて、何か別のものが月をすっぽりどこかへ隠してしまつたかのような感じだった。まるで闇が光を喰つてしまつたかのような感覚。普通ならあり得ない現象だ。アスレイは車を止めてもらい、今度は外に出て確認する。風はやはり吹いていない。それに構うことなくアスレイは空を見上げ月を探す。懸命に探したが月は見つからず、どこまでも闇が広がっているだけであった。

仕方がないので車に戻ろうとした瞬間、アスレイははっとした。分かつたのだ、この異様な現象の正体が。

急ぎ窓に近づきルピナスを呼ぶ。

「ルピナスさん、あなたも分かつていますよね？」

分かつてるのが当然だとも言つような口ぶりだった。その口調に少しムツとするがルピナスは真剣な眼差しで答える。彼女が真剣な表情をする時はどういう状況か決まっている。

つまりルピナスにもこの現象の正体が分かつたのだ。むしろアスレイよりも早くに気付いていたかもしれない。彼女は幻影の襲来が一番多い王都スヴェンパースの女王なのだ。その類には敏感なはずなのだから。

「分かってる。……この嫌な感じ、奴らね」

「ええ、奴らです。胸が締め付けられるようなこの感覚は間違いないです」

「まんまとあいつらの領域テリトリーに入ったわけね」

「ええ、まずいですね。ここはおそらく住宅区。一通りの防御対策はしてあると思いますが、万一あいつらが暴れだしたら、家の一軒、二軒じゃ済みませんよ」

「そうね。……たぶん向こうはこちらに気づいて招いたのね。自分の領域から逃さないために」

アスレイとルピナスが苦い顔をする。今回の敵は相当凶暴な奴らしい。王都スヴェンパースの女王と六帝がまずいと言うのだから本当に厄介なのだろう。

ルピナスがはっと何か思い出した様子で呟く。

「たしか地方都市には都市警察がない」

「つまり、なんですか？」

「忘れたの？ つまりこういう場合、学生鎮魂師が隊を成して対処するの。もし彼らが何にも考えずに攻撃でもしたら……」

その言葉の続きを聞かずにアスレイは走りだした。

続きなど聞かなくても分かる。そして、その後攻撃を開始した隊がどうなるかなど言葉にできない。今回の敵は学生がどうこうできるレベルではないのだ。

頼むこの領域に入っていないでくれ！

アスレイは願いを込めて、精一杯足を回転させる。人の目では確認できない、足が地面に着いていないのではと思うほどの速さで。次第にアスレイの足が赤く光り、一筋の光線が出来上がる。

すでにルピナスと車は遥か後方に消えた。やがてアスレイの体全体が赤に染まり、速度は光速と化す。

これが『神速のアスレイ』と謳われる所以の一つだ。

火の鎮魂歌<sup>ソロ</sup>独奏、<sup>かそく</sup>『火足』。

燃え盛る火炎の如く、アスレイは闇夜の住宅街を駆ける。

赤い煉瓦造りの家が次々と後方に流れていく。時間は数分も掛つていないが、ずいぶんと走った。住宅街の大通りをずっと走つてきたので、そろそろ幻影が見えてもいいくらいである。

アスレイの表情には明らかに焦りがあつた。少しでも遅れたら世界の一部が滅亡するといわんばかりだ。そこまではないが、この街が一つ潰れることは十分にあり得る。

何をここまでアスレイが恐れているのかというと、幻影には殺人衝動が備わつており、人をむやみやたらと襲う。そして悪いことに、殺人を繰り返すことで幻影は自我が芽生える。つまりは成長しているのだ。自我が芽生えると、より強い者を殺すことで得られる快感を求めるようになる。己のありとあらゆる能力を駆使して、獲物を自らの領域におびき寄せ閉じ込める。蜘蛛の巣のようなものだ。

その領域に入ったら簡単には出られない。領域から脱出するには、<sup>マスター</sup>主である幻影本体を倒す、もしくは標的とされた鎮魂師が死ぬかどちらかである。

今回の標的はおそらくアスレイとルピナスの二人である。アスレイにとっては苦戦するような相手ではないが、学生鎮魂師ではおそらく十分もたないだろう。だからこそ焦る。万が一、この領域に彼らが迷い込んでいたらひとたまりもないし、アスレイは彼らを守りながらの戦いとなる。これはかなりのハンディキャップだ。

ちょうどその時だ。前方から地響きのような音が聞こえてきた。アスレイが足を止め、ぱつと顔を上げる。

住宅街の大きな広場にそいつはいた。二階建ての住宅と並ぶほどの巨体。黒い頭には鬪牛を彷彿させる角。丸太のような太い腕は重さに耐えられないのか下にだらんと垂れている。一見すると黒い巨大なゴリラにも見える。その中で細く赤い目が不気味に光っていた。

幻影もアスレイに気付いたようで、息を荒くしてこちらを睨んでいる。

「はあく。お前みたいなやつに嬉しがられても、全然嬉しくないよ」

なんて語りかけても返事は当然ない。その代わりにものすごくうるさい雄たけびを上げた。返事のもりだろうか。

幻影はだらんと下げていた腕を顔の前に持ってくる。戦闘準備は万端というところだろう。

その姿にアスレイは溜め息をつきながらも、剣帯にぶら下げている刀に手をやる。左側の赤い柄の刀だ。

「いいよ。さっさと終わらそう。……さあ、行くつか」

言い終わる前にアスレイが動き出した。疾風のごとき勢いで幻影に向かっていく。

## 01 邂逅

右手を柄に添えたままアスレイは加速する。距離はさほどない。火足を使うまでもないだろう。

幻影も雄たけびを上げて迎え撃つ様子だ。鋭い角が勇ましい。動きはおそらく俊敏ではないだろう。致命傷を負わせてじわじわと攻めるより一気に畳みかけた方がいい。

アスレイは上体を地面と平行になるように倒す。そして勢いはますます激しくなる。一筋の光が巨大な闇に向かうようであった。

これはアスレイが得意とする抜刀術の構えだ。低い姿勢で勢いをつけ、そのまま抜刀することによって威力を何倍にも膨れ上がらす。数ある剣術の中でも一撃必殺の威力を誇る。

アスレイは慎重にタイミングを計る。一撃必殺であるがゆえに失敗した時のリスクが大きい。はずせばおそらく相手の格好の餌食となるだろう。ミスは許されない。

しかし、結果的にアスレイはその一撃必殺の技を放つことはできなかった。

その刹那、けたたましい声が広場に響き渡った。アスレイの声でも、幻影の雄たけびでもない。荘厳な鐘の音を思わせる、力強い声だった。

次の瞬間、アスレイはその声の正体がわかった。アスレイの視界が上空に人影を捉えた。シルエットからすると女性だが、ルピナスではない。

おそらくレグルスの学生鎮魂師だ。女学生は幻影の斜め上に位置し、振り上げられた腕には長剣が握られている。絶好の攻撃機会。女学生はこの時を待っていた、と言わんばかりに雄たけびを上げて突っ込む。

だがそれがどれだけ無謀かアスレイには分かっていた。だから必死に逃げるように叫ぶが届くはずはない。

くそ、と短く吐き捨てアスレイは高く跳躍した。目標は女学生だ。アスレイの体は空中で燃え盛る火炎の如く加速した。やがて赤い光と化して女学生に向かっていく。

「らああああああ！」

女学生の勇敢な雄たけびが聞こえる。気合は十分だ。その意気込みだけは誉め讃えよう。

しかし、相手が悪すぎる。

その威嚇する声に幻影が気付いた。突っ込んでくる女学生を認識すると、不気味な赤い目が細くなった。ニヤツと笑ったのだ。幻影からしてみれば、『鴨が葱を背負ってきた』としか思っていないに違いない。黒い腕を顔面付近に上げて防御態勢をとる。おそらくそこからカウンターパンチを繰り出すのだろう。

そんなことも露知らず、女学生はいざ参らん、と長剣を振りかざそうとしていた。

だがそれは叶わなかった。

キイイイイイン

金属同士が激しくぶつかる音がした。何者かの刀が割り込んで受け止めたのだ。

女学生の目の前には、ふうと安堵するアスレイがいた。

女学生は驚愕の表情で、理解できないといった様子だった。しかし、やがて怒り狂った様子で、「何故止めた！」と言う始末である。アスレイからすれば、「何をしている！ どアホっ！」と叫びたかったがそんな状態ではない。

来た。

直感的に背後から強烈なプレッシャーを感じた。死神と対峙しているかのような、死を感じさせるプレッシャー。振り向くことはし

ない。もし万が一でも顔は殴られたくない。

「グルアアアア！」

けたたましい雄たけびとともに、死神と化した幻影の拳がアスレイの背中を捉えた。

体を碎かれる音と共にアスレイと女学生は地面へと叩きつけられた。

## 01 邂逅

十 十 十

生きたいか？ イエスカノーで答える。

子供の頃そう訊ねられたをよく覚えていて。その時のやり取りは今でも鮮明な映像として浮かび上がるのだから、よほど印象的だったのだろう。

そいつと僕はとても暗い所にいた。僕とそいつの顔が分かるだけで、他には何もなかった。なんともつまらない場所だ。

そいつはひどく焦っていた。まるで僕の答えが自分の生死を分けるかのような雰囲気だった。

僕は戸惑う。死にたいか、と訊かれればノーと答えるだろう。でも生きたいか、と訊かれるとイエスと答える自信はない。まだこの世に生れて八年だったが、両親は他界して独りぼっち。他に頼れる人はそんなになかった。はっきり言ってつまらない世界だ。それ故に、生きたいか、と訊ねられても簡単には答えられない。

僕があんまりにも答えないので、とうとうそいつは痺れを切らした。苛立ったそいつは僕の肩をがしっと掴み揺さぶる。そして僕の耳元でこう囁いた。

この世の答えはいつだってイエスカノーかどちらかだ。それ以外の選択肢はない。お前はどちらかを答えれば永遠の存在になれる。つまり一生生きていってことだ。

その瞬間、僕の体の中で何かが弾けるような気がした。わくわくするような熱い何かではない。どこか醒めた、つまらないものを見たときのような感じだ。

それは永遠の存在なんてものがないのもう知っているから。年齢こそ子供だがそのぐらいの分別はつく。永遠の存在があるなら、何故両親は土の下で眠っているのだらう。僕に顔を見せてくれてもいいだろ。

少し憤りを感じながら僕は答えた。そいつを軽く睨みながら、ゆつくりと口を開く。

「……生きている。僕はまだ生きています。お前に僕の命を決められたくない。……さあ、出て行けよ。僕はお前の質問に答えたよ」

するとそいつは、ちっと舌打ちしてどこかへ消えていった。今まで目の前にあった顔は、砂のようにサラサラと溶けていった。

そして光が暗闇に差し込んだ。

「……い。……お、い。しっかりしろ」

どこからか声が聞こえる。おそらく誰かを呼んでいる声なのだろうが誰かが分からない。

体のあちこちが痛かった。何でこんなに痛いのだらう、と自問するが答えは出てこない。

その時強い衝撃が乾いた音と共に頬を襲った。すぐに手の平で叩かれたということに気付いた。しかしながら叩かれるような覚えは全くない。

まったくどこのどいつだ。今、体がすごく痛いんだよ。もう少し休ませてくれないだろ。

次の瞬間、もう一度頬に乾いた音が響いた。もう今度は我慢ならん。

アスレイは目を開けて思いつきり体を起こす。そして最大限の声で不満を露わにする。

「痛いって言ってるのが分からんかつ！」  
「……うるさい、黙れ。そして……近い」

大声で叫ぶやいなや目の前から声が聞こえた。というより目の前からしか聞こえない。何故かと言えば、アスレイの目と鼻の先にひどく不機嫌そうな顔の少女がいたからだ。

ほんの少し動けばその唇を奪えるだろう。当然現状でそんなことはしない。というよりどこの誰かも知らない相手にキスするのは、キス魔という名の変態でしかない。

アスレイは文字通り後ろに飛びのけて少女を見る。短く整えられた赤毛に、透き通るようなエメラルドグリーンの瞳、全身を包んでいる黒服は戦闘衣だろうか。どこかで見たことがあるような気がしたが思い出せないので諦めた。

「えっと、君は？」

アスレイがとりあえずそう訊ねると、少女は触れてはいけないものに触れられたように怒った。

「何が、君はだ。貴様のせいで滅することができなかつただろうが」

少女の『滅する』という単語ですべて思い出した。ここがどこで、目の前の少女が誰で、自分が何をしたのかを。

## 01 邂逅

「気を失っていたのか……」

「気を失っていたどころか寝言も吐いていたがな」

目の前の少女は何とも痛いところを突いてくる。あんなセリフを訊かれてしまったと思うと、穴があったら入りたい。とりあえず今日学んだことは、人前で寝るのはよそう。

しかしながら、あんなことを思い出したのだから死にかけたんだろ。その証拠にいつもより体が熱い気がする。

その時、唐突に少女が口を開いた。

「私はミネア・スターチス。ここレグルスの学生鎮魂師だ。貴様は？ この辺りでは見ない顔だな。しかし……、まあいい。名乗れ」

「ご丁寧なことにフルネームで自己紹介する少女に、アスレイはやや尊敬する。まず自分から自己紹介はしない。と同時にこの堅苦しい喋り方に若干の苦手意識を覚える。もっと女の子らしく喋ればいいのに。名乗った後に若干の間ができたが追求はしない。訊いたところで野暮だろう。」

ミネアがいい加減不機嫌そうにこちらを見るので、アスレイも渋々名乗ることにした。

「僕はアスレイ。今日、王都からレグルスに来たんだ。見かけないのはそのせいじゃない？」

「ほう、レグルスから。……ところで、貴様には訊きたいことが山ほどある。訊いてもいいか？」

なぜそうなる。自己紹介したら解放してくれてもいいと思う。

ミネアはこちらが承諾してないにも関わらず距離を縮めてくる。四つん這いの状態で膝をずりながら寄って来る。やめろ、なんか怖い。

「……嫌です」

咄嗟に答えた言葉は真実だが、選択を間違えた。おそらく数ある選択肢の中でもっとも選んではいけない言葉だ。ミネアはさらに距離を詰めてくる。

「貴様、先ほど私の鎮魂を邪魔しておきながら、嫌はないだろう。せめてもう少し遠回しに答えられないのか、うん？」

先ほど顔が近いと言っていたわりに、ミネアはアスレイにどんどん近づく。また目と鼻の先状態になってしまった。さらに、作り笑いの顔がアスレイの恐怖心を駆り立てる。

アスレイは汗ジツで、声を絞り出すように答えた。

「そ、そうですね。じゃあ一つだけ、答えます」

満足したのかミネアはようやく一歩引いた。

そしてアスレイに厳しい口調で訊ねる。

「では訊くが、貴様何故邪魔をした？」

絶対来ると思ったが、これに関してはアスレイは自信を持って反抗できる。

「あなたを守るためです」

アスレイはきっぱりと言った。しかし、当然ミネアは頭の上にク  
エスチョンマークが浮かんでいる。

「……言っている意味がわからん。というよりふざけているのか」

この返答も予想の範囲内。アスレイはまたもきっぱりと言う。

「君はあの幻影がただの巨大なやつだと思っているだろうね。でも  
違う。あれは君たち学生が相手をしていい相手じゃない」

「ますます意味がわからん。私たちはこの都市を守る要だ。私たち  
が滅さなければ都市が滅ぶ」

「……その前に君たちが全員滅ぶだろうけどね」

その瞬間、ミネアの表情が変わった。困惑から憤りへと変化した。  
そのまま殴りかかってくるのではと思ったが、必死に怒りを抑えて  
アスレイに続きを求めた。

アスレイは一息ついてから話を続けた。

「……あれは、レベル？と呼ばれる幻影です。たぶん君たち学生が  
相手をしてきたのはレベル？までの幻影。データ上、幻影になって  
からの殺人回数が百人未満のものを指します。自らの意思に関係な  
く殺戮を繰り返す幻影です」

「なるほど、確かにレベル？とやらの性質は今までの幻影に当ては  
まる。だがそうなるとレベル？とやらが自らの意思を持っているよ  
うに聞こえるぞ」

「勘が良いですね。その通りです。レベル？は自我を持っています」

ミネアがはつとして口を押さえる。驚きを隠しているつもりだろ  
うが、目が見開いている時点で無意味だ。

「じ、自我というと私たちのように、か？」

「ええ、僕たちと同じようにです。彼らは一般人では飽き足らず、より強い、より質のいい人間を求めます」

「よりいい人間？ ……まさか」

ミネアの反応にアスレイはニコツと笑う。そして答える。

「ええ、僕たち鎮魂師を狙ってるんです。その中でもさらに強い人をね」

ミネアは驚愕のあまり言葉が出ないようだ。当然だろう。今まで一般人の命だけを守ればよかったのに、今度は自分たちの命も守らなければいけないのだから。

## 01 邂逅

アスレイは、驚きを隠せないミネアをよそに立ち上がった。いつまでもお喋りをしているわけにはいかないのだ。

体はまだ痛かったがいざれ治るだろう。現状では腕が使えれば問題ない。落ちていた赤い刀身の刀を拾い、鞘に納める。そして剣帯に吊るす。

幻影を確認すると、かなり遠くにいたが存在は認識できた。進行方向はアスレイが来た方向、つまりルピナスが待っている場所に向かっていている。

まずいなあ、とアスレイは頭を掻いた。あのぐらいの幻影ならルピナスにとっては朝飯前だろうが、後々お小言を言われると思うと面倒だ。

仕方ない、と諦め気味にアスレイが足を踏み出したその時。

「待て」

ミネアの鋭い声がそれを制した。先ほどまでの驚いた様子はどこ吹く風だ。ミネアはすでに立ち上がり、黒い隊服の汚れを払っていた。

出鼻を挫かれたアスレイは反射的に足を止める。後ろを振り向いてミネアと対峙する。

「何ですか？ できるならもう鎮魂しに行きたいんですけど」

明らかに不機嫌さが窺える対応だが、ミネアは屈しない。

厳しい面持ちのまま早口にアスレイに問う。その様子はさながら映画で見た、軍隊の教官が部下に尋問するようであった。アスレイも思わず萎縮する。

「貴様、先ほど私たち学生が相手をしてはならないと言ったな。しかし、貴様も私と年齢は然程変わらぬように見える。その貴様が何故鎮魂できるといふのか」

「年齢は関係ない。ただ単に僕と君たちとは次元が違うから……」

言った瞬間に口走ったことを後悔した。ミネアの質問がアスレイの身分を誘導するものであるのは明らかで、それに素直に答える自分がどうしようもない馬鹿だと思う。

しかし、答えてしまったものは仕方ない。どうせ何時間後には否が応でも正体を明かすのだ。隠さず話すのが賢明だろう。ミネアが勝ち誇った顔をしているのが気に入らないが。

アスレイは頭を掻きながら渋々答えた。

「はあ、分かりました。正直に言いますよ。僕はアスレイ」スヴェン」エーデルワイズという者です。……もう分かれますよね」

おそらく想像はしていたのだろうが、ミネアは少し驚いたような呆れたような表情をしていた。

それほどアスレイという人物が相応しくないように見えたのだろうか。

「貴様が『王都守護六帝』だと？ まさか……いや、そうかもな。私に気づかれることなく懐に忍び込むスピード、あの巨大な幻影の攻撃をくらっても立ち上がる頑強な肉体。……どれも学生の域を超えている」

ミネアが今度は羨望の眼差しで見てくる。

本当にココロと表情が変わるなあ。アスレイは心底そう思った。

ミネアが続ける。

「では貴様は今から幻影を鎮魂しに行くのだな？」

「ええ」

アスレイが短くその旨を伝える。

会話はそこで止まり、今度こそアスレイは足を踏み出そうとする。幸いにも幻影の移動速度が遅いため、まだ目視できる距離だ。火足を使えば瞬時に追いつくだろう。

しかし、アスレイはこの時まで知らなかった。ミネアという少女の揺るぎない正義感を。

アスレイが両足に力を溜めて火足を使おうとしたその時、再び鋭い声はその場を制した。

「待て！」

二回目だったのでもう慣れた。嫌な発言が飛び出すぞ、と直感的に思った。そして嫌な予測は大抵当たるのが相場で決まっている。

ミネアが鋭く宣言した。

「私もついてく」

やはり当たった。アスレイは恨み事のように心の中で呟く。

「何でそうなるんですか。僕の話聞いていなかったんですか？

あれは君が相手をしていい敵じゃない」

そう言って宥めようとするが、それはもはや無意味だった。アスレイの失敗は、ミネアの強い正義感を知らなかったことと、彼女に出会ってしまったことだろう。

ミネアは決意に満ちた表情で言った。

「それはよく分かった。だがな、それを聞いて、はいそうですかと引き下がるやつは鎮魂師なんかやめた方がいい。お前は私たちをなめている。いくら学生でも私たちは鎮魂師なのだ。自分たちの使命は最後まで守り通す」

鎮魂師の使命、それは都市の夜を守ること。そのためには、人々を襲い殺戮を繰り返す幻影を滅さなければならぬ。鎮魂師でなければ滅することはできない。だから幻影がいると知っておめおめと逃げるのはそれに反する。たとえ勝利の確率が低くても、死ぬ確率が高くても、だ。

ミネアは純粹にそれを全うしようというのだ。だからこそこれほどまで決意に満ちた表情をしているのだ。

その決意を知って無下にできるはずがない。

「……分かりました。でも死なないでくださいね」

「勿論だ。貴様こそ足を引っ張るなよ」

「言いますね。……では、行きますよ」

アスレイが言い終わると同時に二人は駆けだした。依然としてのろろと移動する黒き幻影を追う。

## 01 邂逅

アスレイは再び足に力を集中させる。今度は一気に幻影に追いつくために最初から火足を使う。アスレイの両足が次第に赤みを帯びていく。そして、空間が熱を帯びたかのように蒸気に包まれる。

アスレイが準備はできたか、とミネアを見る。するとアスレイに比べて力を弱いものの、両足は赤みを帯びていた。どうやら彼女も炎の鎮魂歌を使えるらしい。

「君も炎の鎮魂師か……」

感慨深げに言うアスレイにミネアは怪訝な顔をする。そして即座に問う。

「それがどうしたのだ？」

ミネアがおかしいか、とやや不機嫌なのが見てとれたのでアスレイはすぐに修正する。

「いや、昔助けた女の子も確か炎だったなあと思って」

「えっ？」

「まあ本当に子供の頃で、僕はともかくその子は全然使えてなかったけど。使えたのは火足くらいで、あとは滅茶苦茶に力を使ってたなあ」

ミネアは、アスレイが自分のことを言っているのではないかと思つた。夢で見た光景は現実にあったことで、その時は栗毛の少年に助けられた。何よりも燃えるような赤い瞳が印象的だった。そういえば、こいつも……。

ミネアはアスレイの顔を見つめる。やはり栗毛で、燃えるような赤い瞳をしていた。

その瞬間、ミネアは胸の高鳴りというか、妙な親近感をアスレイに覚えた。まだアスレイがあの中の少年だと決まっただけでもないのに。第一にアスレイはミネアを見てあの中の少女だと気づいていないのだ。

しかしながら、頭で分かっているつもりでも心ではどうにも意識してしまうものだ。アスレイをちらっと見ると、怪訝な顔でこちらを見ていた。

「ええと、どうかしましたか？」

「な、なんでもない！」

「……何で怒ってるんですか」

「お、怒ってない、いない！ さあ、そろそろ行くぞ」

アスレイはまだ怪訝そうな顔をしていたが、これ以上会話をしていると口が滑りそうだった。迂闊にも、「あの中の少年か？」と訊ねればどうなることやら。

ミネアは高ぶる感情を抑えて、赤い足で力強く地面を蹴る。燃えるような赤い光がレグルスに出来上がる。

納得いかないまま、それに倣う形でアスレイも続く。

#### 炎の鎮魂歌独奏、火足

地面を蹴るやいなや、先ほどまで小さかった幻影がどんどん大きくなっていく。アスレイはミネアに合わせて速度を落としているが、それでもミネアの火足も速かった。

赤い光と化した二人の両足がブウォオオオという音を立てながら住宅街を駆けていく。もの凄い速さで煉瓦造りの家が後ろに流れて

いく。

アスレイが右手を刀の柄に添えた。抜刀の構えに入るつもりだ。左手を払い、ミネアに後ろに下がるように指示する。威力が尋常ではないため、攻撃の余波は横にも及ぶ。もし横に人がいたら腕の一本はなくなることだろう。

ミネアは素直に後ろに下がり、アスレイの攻撃を見ることにした。幻影の黒い肉体が目の前をふさぐ。巨大な壁が目の前に存在しているようだった。幻影はまだこちらに気づく様子はなく、ゆっくりとした足取りで前に進んでいる。一歩進むたびに道路にひびが入り、大きな地鳴りが聞こえる。

不意にアスレイがこちらを振り向き、につこり笑った。あまりにも急なことなのでミネアはたじろいだ。というより何でこんな時に笑っていられるのが疑問だった。何もしていないのにミネアは、巨大なプレッシャーで汗ジトだ。

アスレイは笑ったまま大きく、ゆっくりと口を開いた。残念ながら高速移動のために言葉は聞き取れなかったが、何を言ったのかは分かった。

見ていてください。これが僕です。

おそらくそう言ったのだろう。見ていてくださいとは生意気な奴だ。その笑みは自信から湧き出てくるのだろう。ミネアは右手の親指をグツと立てて突き出した。

いいだろう。私にお前を見せてくれ。

アスレイが嬉しそうに頷いて再び前を向いた。そして上体を地面と平行にして激しい勢いをさらに激しくする。

来る。ミネアは直感的に思った。抜刀のタイミングはアスレイ自身が決めることで、後ろからでは抜いた後にしかそれを認識できない。しかし、それでもミネアにはアスレイが抜刀するタイミングが分かった。

刹那、前方からもの凄い力を感じた。言うまでもなくアスレイが抜刀したのだ。しかし、今までに感じたことのないような鋭く、大

きな力。空間が割れたのではないかと思った。特に抜刀速度は尋常ではない。数ある剣術の中でも抜刀術は速度において最高の部類だ。ミネアも何回か見たことがある。しかし、これほどまで速いのは見たことがなかった。というより速すぎてよく分からなかった。

聞こえてきたのは音三つ。

『チャキ』

『シユ』

『グシユ』

アスレイが行った一連の動作。たった三つの効果音だけで壁のような巨体を斬り裂く一撃必殺の技。

ミネアはアスレイの実力に畏怖の念を覚えた。生唾が咽喉を通る。額に浮き出た汗を腕で拭う。

これが、『王都守護六帝』。……アスレイ「スヴェン」エーデルワイス。

鋭い衝撃はしばらく続き、止んだ。

刹那、前方からこの世のものとは思えないほど激しい断末魔の音が轟いた。

そして次に飛び込んできたのは、刀を右へ振り切ったアスレイと黒い血しぶきを上げながら真っ二つになっている幻影だった。ミネアは急いでアスレイに駆け寄る。少なからずともあの技を見て興奮していたのだろう。

「お前……凄いな」

「ええ、当然です」

アスレイがきつぱり言い切る。少しだけむかつく。

断末魔はやつと収まりになり、アスレイが二つになった幻影に語りかけた。ミネアにはその横顔がどこか悲しげな表情に見えた。

それはミネアにとって聞き覚えのある言葉。でも少しだけ違う言葉。温かくて、どこか悲しい言葉。

「苦しいか？ 苦しいよな。でもなこれでお前は救えたよ。」

そう言っアスレイは微笑んだ。少しだけ瞳が潤んでいた、ように見えた。

## 01 邂逅（後書き）

これにて01 邂逅は終わりです！

02でお会いしましょう^^^

## 02 入学と入隊

春の柔らかな風に吹かれて桜の花が舞う。桜の花が舞う季節は出会いと別れの季節。

ここベルナル総合学園もほかならない。いつもより体育館に人が集まっているのは、この二つのうちの一つである『出会い』があるためだ。そう、今日はベルナル総合学園の入学式である。

第一学年から第六学年まで在籍する学校のため人数はかなり多い。そのため体育館は六段構造となっており、一段目が一年生、二段目が二年生というように振り分けて使う。今日は入学式のため、重要な式典の時だけ使う中央フロアに新一年生が並んでいる。新品の制服を着る姿は何とも初々しい。お互いに出身中等部を確認し合ったり、身長を比べたりしている。やはり初々しい。

第二学年からは、それぞれの指定席について式の始まりを待っている。さすがに上級生はしゃんとした様子で威厳がある。新入生の意気揚々とした姿を見て微笑んでいる。

しかし、それもだんだんと崩れ始めてきた。所々でひそひそと話し声が漏れている。若干棘のある言葉も聞こえる。

それも当然かもしれない。もう既に入場してから一時間も経過しているのだ。しかし、理由が理由だけにあまり邪険にできない。式の責任者、学校の長である校長が重要な会議で遅れているというのだ。怒りたくても怒れないわけである。

その時第二学年の一部でこんな声が聞こえた。

「……ねえ、ミネアどこ行った？」

第四学年でも同じような声が聞こえた。

「イーザンとシャマルがいねえぞ」

「サボりか？」  
「まさか……あゝシャマルならあり得る」

学年が違ったため情報がうまく伝達しないのが幸いした。校長が遅れているのは、言うまでもなく第二十一部隊が関係していた。正確には今日入学する一人の男子学生のせいだが。

十 十 十

呆然とした気分で、アスレイはソファに腰かけていた。全体的に白色で統一された部屋にある、白い来客用のソファ。隣にはルピナスが座っていた。

彼の目の前には、濃い顎鬚が印象的な男が座っていた。男は甘い容姿を持ちながらも風雪を浴び続けた厳しさが見受けられた。アスレイは一目でこの男が優秀な鎮魂師であることが分かった。

「君がアスレイ」スヴェン「エーデルワイスカね」  
「はい。あなたは……校長先生です、か」

疑問形にしようとして、この部屋に入る前に見た、扉にかかっている校長室のプレートを思い出してやめた。

ルピナスがそれに気づいてクスクス笑う。うるさいから黙ってください。

「ええ、私がベルナル総合学園校長のオズウェル」ヘムロックだ。よろしく、アスレイ」

オズウェルがすつと左手を差し出す。アスレイも右手を差し出し握手を交わす。とても大きくて硬い手だった。

「こちらこそお願いします、校長」

「一対一の時はオズウェルでいい。私も一応は鎮魂師だ。鎮魂師には基本的に上も下もないからな」

「やはり、あなたも鎮魂師でしたか。しかもかなりの実力を持っていますね」

「そうよ。こいつは、私の元側近で、あんたが六帝になるのと同じ時にレグルスに派遣されたの。ていうかしたんだけど」

隣のルピナスが話に入ってきた。だがルピナスの側近という事実には驚きだ。噂によればルピナスの側近は王都での鎮魂回数が一万回を超え、実力は王都守護六帝の上を行くと聞いていた。しかし、その正体は謎のまま、ある日どこかへと身を潜めたと言われていたのだ。アスレイが一度会ってみたいと思っていた人物である。その人物が目の前にいるのだ。

「あなたがこのアホの側近でしたか」

「誰がアホか、誰が」

「王都から特に迷うこともない道を延々と迷い、ガス欠を起こして迎えに来てもらう人をアホと呼ばずに何と呼べばいいのですかね」

これでもかというほどの皮肉だが言われても仕方のないことである。アスレイがレベル？との戦闘後、車で再び移動を開始したのが迷子はどこまで行っても迷子なのであった。同じような道を何度も見て、終いにはガス欠だ。アスレイの言い分ももつともである。一国の女王をアホ呼ばわりするのは別として。

「ははは、仲がいいのだな。ルピナスも相変わらずの方向音痴だな」  
「へえ、昔から迷子なんですか。良かったですね、人生はぎりぎり迷子になっていないようですから」

「ぐう……アスレイ、王都に帰ってきたら覚えておきなさいよ」

言い返せないルピナスの精一杯の反撃だった。  
ところで、とアスレイが話の軌道修正をする。

「何故僕はここに呼ばれたのですか？ もう式典のはずなんです」

オズウェルがうむ、と髭をいじりながら頷く。

「実はなあ、君は当然学生としてここに来たのだから、どこかの隊に入らなければならぬ。君ならどこの隊に入れても構わんのだが、まあそこは私とルピナスの判断で決めさせてもらったが」

「まどろっこしいですね。つまり、何ですか？」

「つまり、君はすでに学生の域を遙かに超えている。だから、隊に所属すると少しばかり問題が出てくるだろう」

オズウェルがほら、と目で語ってくる。それでアスレイには十分に分かった。自分の実力、これが邪魔になるかもしれないということだ。

そして自分がいるが故に、他の隊員に今までよりも負担をかけてしまう。昨夜のレベル？のように、学生が対処できる相手ではないのも出てくるだろう。そしてそれはアスレイの隊だけでなく、他の隊にも影響を及ぼすだろう、とオズウェルは危惧しているのだ。

「なるほど、でも大丈夫ですよ。普段は力を押さえて皆さんに合わせれば。それにレベル？は基本的に王都にしか出脱しません。前回はこのアホがいたから狙ってきたんでしょ」

「……はいはい、私のせいですよ。でも、まあそこはホントだから。たぶんアスレイだけじゃ現れないと思うよ。私の強い波動を感じ取って奴らは出沒するから」

「ふむ、そうか。側近をしていた時はレベル？にはあまり遭遇しな

かったからな。奴らの特性にはさっぱりでな」

オズウェルはそれを聞いて安心したようだ。

「オズウェル、ところで僕が配属される隊はどこですか？」

「ん、それはなあ……もうすぐ来ると思うぞ」

その時、白い扉が勢いよくノックされた。返事をする間もなく扉が開く。いや蹴り飛ばされた。

## 02 入学と入隊

乱暴に開けられた扉からずかずかと人が入ってくる。

靴音は三つ。そのうちの一つだけが力強く乱暴だった。おそらく扉を蹴ったのはこの人だろう。

アスレイの背後から来る音だったが、アスレイが振り向くことはなかった。そのときアスレイは、何故だかその人物が脳裏に浮かんでいた。昨日出会った少女、活発で行動力のありそうな少女。だから忘れるはずがない。

確か名を。

「第二十一部隊副隊長ミネア・スターチス！ 只今参上しました」

アスレイの予想通りだった。昨日で少しは慣れたが、もう少しボリュームを下げてもらいたい。

声を荒げながらも言葉づかいは礼儀正しい。少し硬すぎるかもしれない。その後に遅れながら男が二人ついてきた。

「失礼します。第二十一部隊隊長イーザン・オーキッドです」

「失礼します。第二十一部隊隊員シャマル・ターナップです」

イーザンはミネアに比べ落ち着いた様子で、冷静な隊長の風格だ。一方、シャマルは間拔けた言葉で態度もどこか気だるそうな印象を受ける。

オズウェルが無言で頷き、どうしたねと訊ねる。

「どうしたね……じゃないですよ！ 呼び出したのは校長先生じゃないですか！」

ミネアが声を荒げたまま答える。  
アスレイの横でルピナスが耳を塞いで、予想以上だと嘆いた。  
そうでしょうとアスレイは笑った。  
そんなことは知らずミネアが続ける。

「『式の前に校長室に来てくれ』って言ったじゃないですか。一体何の用ですか？ 他の生徒に迷惑になりますよ」

一気に畳みかけてきたミネアにオズウェルは思わず耳を塞ぐ。どちらが生徒だか分からない。

「……まあ落ち着け」

ようやくイーザンが宥めて、渋々ミネアも静かになった。  
オズウェルが一つ溜め息をついて前を向いた。どうやらオズウェルはミネアが苦手なようだ。

「すまん。君たちを呼んだのは別に気まぐれではない」

「そんなことは分かっています」

「まあ、そうせっかちになるな。……というより気付かんかね？  
呼ばれた訳が」

「分からないから訊いて……」

そこでミネアの言葉が止まった。今まで冷静を欠いていたので周りがよく見えていなかったのだろう。ミネアの視線が白いソファに向けられる。そこに座っている二人に、特に栗毛の少年に向けられる。

どこかで見ただ後姿。どこかで見ただ栗毛の髪。その背中から感じられる強いオーラ。昨日感じたあの大きな力に似ていた。

忘れるはずがないその名がミネアの脳裏をよぎる。

アスレイ「スヴェン」エーデルワイス。

「お前……何で、ここにいる？」

その言葉がアスレイに向けられたのは明白で、それを無視することはできなかつた。アスレイはソファから立ち上がって振り向く。

燃えるような赤い瞳でミネアを見つめる。

そして微笑んだ。

「また会いましたね、『先輩』」

『先輩』に力を入れて、楽しそうにアスレイが答えた。隣のルピナスがニヤニヤしていたのがむかついたが。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3146v/>

---

戦慄の鎮魂歌

2011年10月6日18時52分発行